

「それでも、私は憎まない」

箴言 10章12節

聖学院大学 人文学部チャプレン 柳田 洋夫

この秋のキリスト教週間においては、「平和の祈り～戦後70年を覚えて～」というテーマのもとで全学礼拝が守られています。1945年の敗戦から70年の間、ともかくも日本が平和のうちに歩むことができたということは感謝すべきことです。しかしながら、これから先、この国が戦争に巻き込まれることが、もしくは自ら戦争へと飛び込んでいくおそれは決してないとは言えないと思います。そして、世界を見渡してみるならば、至る所で、今この瞬間もどこかで争いがあり、人々の命が、生活が奪われているという悲しい現実があります。そういうニュースを知らされるたびに、この人間の歴史において、争いは決して止むことはないのかと悲観的な気持ちにさせられます。しかし、一方、平和のために自らの生涯をかけてきた人々も、今に至るまで数多くいますし、そのことによって、平和ということは確かに人類が目指すべき目標であるということがいつそう多くの人々によって理解されるようになりました。そのことも私たちはしっかりと覚え、いたずらに悲観的な考えや、力のみが世界を支配するというような誤った考え方に陥らないようにするべきだと思います。

さて、今日お話したいのは、平和のために力を尽くしているひとりのパレスチナ人の医師、イゼルディン・アブエライシュという人のことです。ノーベル平和賞の候補にもなった人ですが、このイゼルディンさんが出版した本が、昨年、日本語に翻訳されて、話題になりました。本人も日本にやってきてスピーチをしました。その本の日本語のタイトルは『それでも、私は憎まない』というものです。原著は“I Shall Not Hate”ですから、ほぼその直訳と言ってよいでしょう。

イゼルディンさんは1955年にガザの難民キャンプに生まれました。ガザというのは、中東のイスラエルに囲まれているごく狭い地区のことです。イスラエルについては、みなさんも旧約聖書の学びにおいて何度も聞いたと思います。同時に、たいへん多くの争いがこの地域で今に至るまで繰り返されてきたことを知っている人も多いと思います。政治的には複雑な争いになっているようですが、ガザ地区に関して大雑把に言うならば、イスラエル人とパレスチナ人との激しい争いがこれまで続いてきました。その争いの中で、パレスチナ人は、ガザ地区と、ヨルダン川西岸地区という二つの地域に押し込められて生活しなければならない状況に追い込まれていきました。特に、イゼルディンさんが生まれ育ったガザ地区の難民キャンプは、世界の人口密度とも言われていて、東京23区で最も人口密度の高い豊島区の8倍近くにも達するそうです。それほどまでに、人がぎゅうぎゅう詰めにされているところである上に、打ち続く破壊と、イスラエルによる封鎖によって、人々は水や電気などのライフラインにも事欠く生活を強いられてきました。

イゼルディンさん一家も、そもそもは豊かな農場を持っていたのですが、イスラエルが攻めてきて、命からがらガザの難民キャンプに逃れてきたのでした。イゼルディンさんは、そのような悲惨な生活の

中で、家族のために、時には朝3時から働きながら一生懸命勉強して、医学の道に進みます。そして、彼は、奨学金を得てカイロ大学で学び、産婦人科医としてイスラエルの病院で働くことになりました。それはいわば敵のもとで働くということでもあるので、双方から少なからず非難を浴びたようです。そればかりか、自分の住むガザ地区からイスラエルに通勤するのにも、毎回、いやがらせのような厳しい、屈辱的な検問を味わわなければなりません。しかし、そういう生活の中でも、イゼルディンさんは忍耐して一生懸命仕事をし、人々から信頼を勝ち得るようになっていきました。

しかし、悲劇がイゼルディンさんの家族に襲いかかりました。2009年1月16日、イスラエルの戦車がイゼルディンさんの家にロケット弾を続けざまに打ち込んだのです。それによって、3人の娘と、娘のようにかわいがっていた1人の姪の命が一瞬にして奪われました。さらにもう1人の娘は瀕死の重症を負いました。

混乱と絶望の中で、彼がすぐさまやったのは、イスラエルの知り合いに連絡することでした。連絡を受け取ったのは、シュロミ・エルダーというイスラエルのテレビキャスターです。ちょうど生放送中でした。それにも関わらず、エルダーさんは電話に出ました。そして、事柄の重大さを知らされた彼は、放送中のスタジオを飛び出して、イゼルディン一家を助けるために、イスラエル国防軍の関係者など、知っている限りの人々に連絡しました。そのこともあって、救助がやって来て、何もないガザ地区を出て、イスラエルの病院で治療を受けることができ、重症を追っていた娘のガイーダも一命をとりとめました。この一部始終はテレビ中継されて、ガザのパレスチナ人がいかに悲惨な状況に置かれているかということ、イスラエルの多くの人びとが初めて知ったそうです。イスラエルの首相も見ている、涙を流したという話もあります。

この事件を知った人々は、イスラエルに復讐すべきだ、とイゼルディンさんに言いました。確かに、彼にはイスラエルにも多くの友人がいましたし、今お話ししたように、助けられもしています。しかし、イスラエルのやったこと、もしくはそれまでしてきたことは、国際的な非難を浴びるのも当然のことであり、イゼルディンさんは、愛する3人の娘の命が奪われているのですから、何らかのかたちで復讐を考えるという可能性もあったはずですが、実際に、歴史を振り返ってみても、昨日まで仲良く助けあっていた者同士が何らかのきっかけで、突然、いがみ合い、血で血を洗う争いを繰り広げるということは、数限りなくあったことです。ですから、イゼルディンさんがイスラエルを憎み、復讐を企てるということも十分ありえたはずですが、実際に彼も考えました。これから自分は「暗黒の道」を歩むこともできれば、「光の道」を歩むこともできる。しかし彼は、決断しました。憎しみと復讐という暗黒の道ではなく、未来のために光の道を歩むことを決意しました。

彼はまた、自分の置かれた境遇は、まるで、突然全てを奪われた旧約聖書のヨブのようだと言っています。しかし、自分の上で起こったことは神の意志であり、そのことによって使命が与えられたのだと考えます。その使命とは、悪や絶望のためではなく、善のために力を尽くすということです。そして、平和のために働くということです。彼はまた、お医者さんらしく、こうも言います。「予防接種が必要だ。人々に尊敬と尊厳と平等という注射をして、憎しみに対する免疫を与えなくてはならない」。そのためには、まず、草の根レベル、つまり個人同士が顔と顔をあわせるところからお互いの信頼や尊敬を培って、お互いが変わっていかねばならないと述べています。

また、そのようなイゼルディンさんの平和への思いは、イスラム教の信仰に支えられているものでもあります。この宇宙で最も神聖なものは愛と自由であり、この世界は一つの家族であることを『コーラン』が教えるゆえに、私たちは一致団結して共通の敵に立ち向かわなければならないと彼は言います。共通の敵とは、お互いに対する「無知」と「隔ての壁」です。そして、より明るい未来を実現するために、私たちは一つになって語り、一つになって前進しなければならないと彼は言います。そのような信念と理想に支えられて、イゼルディンさんは、パレスチナとイスラエルの、そして中東世界の平和の架け橋になるべく、今もグローバルに活動を続けています。

平和ということに関して、最後に、内村鑑三という日本のキリスト者の言葉を紹介したいと思います。彼は、戦争に徹底的に反対する、いわゆる「非戦論」を唱えたことでも知られています。内村はこう言います。「勝つこと必ずしも勝つにあらず、負けること必ずしも負けるにあらず。愛することこれ勝つことなり、憎むこと、これ負けることなり」。勝つというのは愛することであり、負けるというのは憎むことだということです。この言葉は、イゼルディンさんの思いにも通ずるものがありますし、また、今日与えられた旧約聖書箴言の「憎しみはいさかいを引き起こす。愛はすべての罪を覆う」という言葉を改めて思い起こさせるものでもあります。

しかし、内村の主張は世間から非難と嘲笑を浴びました。今でも、「平和」を唱えることは、空しいこと、愚かなことだと多くの人々が感じているようです。もっと現実的に、リアルに状況をとらえなければダメだ、というわけです。しかし、キリスト教信仰においては、まさに平和こそがリアルな現実なのです。エフェソの信徒への手紙第2章14節以下にはこうあります。「実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました」。すでに、キリストが十字架にかかれたその犠牲によって、敵意という隔ての壁は打ち破られ、平和が実現している、ということです。だからこそ、イエス・キリストにつながっているキリスト者は、イゼルディンさんと同じように、平和への望みを失わず、平和のために祈り、平和のために行動することができるはずです。

今はどちらかと言えば、ネット上などで、互いに対する憎しみを煽るようなすさんだ言葉が飛び交っているようです。しかし、平和などいらないとほんとうに思っている人はいないはずです。ですから、平和のために私たちは何を考え、何をなすべきか、そのことを、みなさんには、この聖学院における共なる学びと祈りの中で真剣に考え続けてほしいと願います。

2015年10月21日 聖学院大学 全学礼拝(シリーズ礼拝)